日本
ハンザキ研究所ニュース　2013(4)：通巻 No.88
発行２０１３年４月３０日
〒６７９－３３４１兵庫県朝来市生野町黒川２９２
Tel／Fax:０７９－６７９－２９３９
E-mail：info@hanzaki.net
URL：http://www.hanzaki.net
NPO 法人　日本ハンザキ研究所　栃本 武良

ヘビ食いハンザキ

ハンザキの餌は何かという質問を再々受ける。多くの人が魚であると思っていたようだが、魚は素早く泳ぐ上に中・上層を遊泳するものはハンザキの鼻先に中々やって来てくれないので捕まえにくい。ハンザキは待ち伏せ型の捕食者であり、体の幅いっぱいに開く半分に裂けたかのような大きな口を瞬間的に開いて鼻先にやって来た獲物を丸呑みにする。このような餌取りでは川底を歩くサワガニは捕食しやすいボリュームのある餌だろう。昭和 27 年の特別天然記念物指定以前の研究では腹を裂いての胃内容物の報告があり、「ハンザキの好物はサワガニ」とされているが、野生の生き物はより好みはしていられないのだ。私の「最も食いやすいどんくさい餌はハンザキ」と言う話に「共食いですか？」と驚きの声が上がる。同じ川底で行動する生き物は出会いがしらに反射的に丸呑みするので、口の大きい方が優位である。

市川源流域でヘビをくわえているハンザキ（写真／黒田真澄 2013 年 4 月 28 日）

この写真は川の中で種類が分らないがヘビをくわえているハンザキである。当法人の会員黒田さんの撮影だ。餌動物としてのヘビの報告は昭和 20 年以前にはアオダイショウの報告が 1 例あるのみだった。私が平成 13 年に島根県立宍道湖自然館に着任するとすぐに、地元の方からアオダイショウの頭をくわえているハンザキの写真が届けられた。そして、鳥取大の岡田純博士（当法人副理事長）から腐ったヤマカガシを食っているという写真もいただいた。でも、地元のお母さんからはハンザキをさばいているとヘビが出てきたので、以来、食べるのを止めたという話を聞かされた。地域の人はよく知っていることなのだ。

写真 1　私が高校時代に作った小さな池

写真 2　農家民宿“まるつね”オープン

写真 3　窓の外の桐に止まるオオルリ

写真 4　窓ガラスに映る自分にアタックするオオルリ

写真 5　春の雪（4 月 20 日）

写真 6　イモリの春（右がプロポーズ中のオス）

写真 7　押しガエル（モリアオガエルの事故死）

写真 8　押しネズミ（アカネズミの事故死）

写真 9　窓ガラスに当たって死んだヤブサメ

写真 10　くつろぐアナグマ

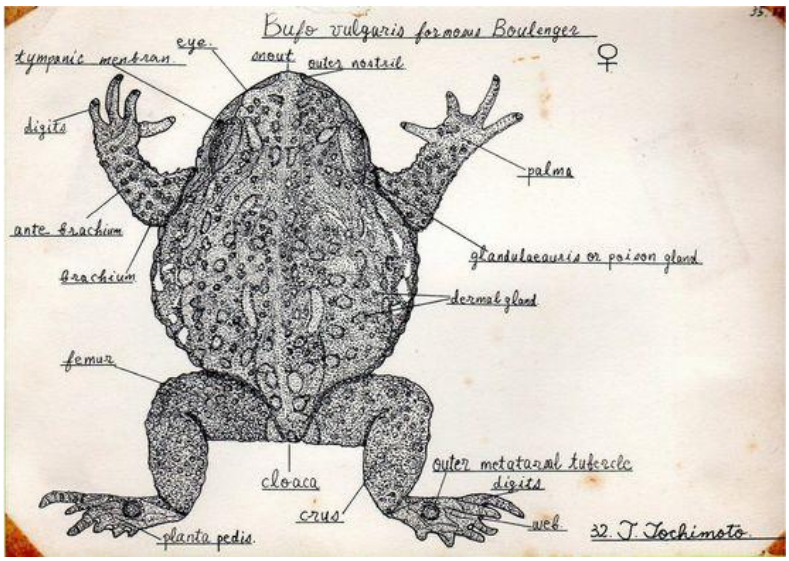


写真 11　50 数年前の解剖実習に使ったヒキガエルのスケッチ

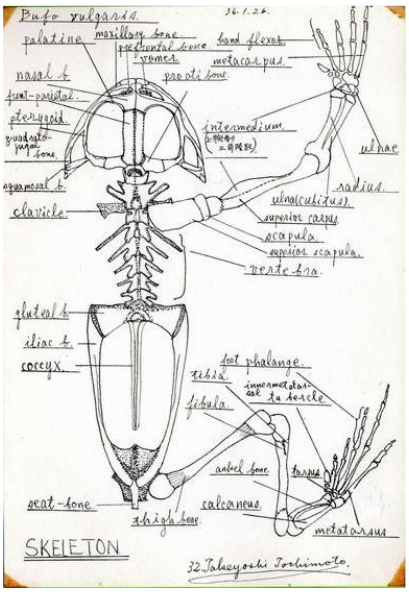


写真 12　同じくヒキガエルの骨格スケッチ

東京のヒキガエル

私は都立国立高校の 11 期生である。同窓生が毎月送ってくれる“たちばな三四会だより”は昭和 34 年卒業（たちばなは校章）ということで、古希を過ぎた十数名が毎月私の故郷である立川で集まりを持っている。この 4 月の便りの中に同級生だった久満君の“ひき蛙”という記事が目にとまった。府中市在住で当時は立川同様に自然環境の豊かな土地であったが、共に今やベッドタウンとして人口増加が進み武蔵野の自然など痕跡しか残されていない。久満邸の庭には父上が造られた 7 メートルほどの池があり、30 個体ものヒキガエルが“蛙合戦”を毎年のように演じてくれるのだそうだ。都会化された町に昔のままの自然がわずかに残されているというホッとする話は生き物好きの私から見れば素晴らしいことだ。しかし、近所の方から苦情が持ち込まれたという。子供たちがカエルを気持が悪いとかロードキルにあったヒキガエルの死体が不潔であるということだったそうである。カエルが気持ち悪いと思うのは人それぞれのことだから仕方がないが、私の子供時代には格好の遊び相手だったことを考えると残念なことだ。それだけ現在の子供たちが自然に接することが無くなってしまったということなのだろう。

一方で、私の実家の庭にも直径 1 ㍍程度の小さな池がある。確か高校生の頃に私が造ったものだと思うが、試験シーズンの 3 月初め頃には庭で「クウッ・クウッ」といった雄ガエルが雌を呼ぶ鳴き声が聞こえてきたものだった。ああ今年も無事に産卵期を迎えたのだなと安堵したものだった。そのヒキガエルたちが 50 年も過ぎた今も繁殖の場として池を使っているという兄の便りはうれしいものだった。しかし、小さなこの池に何匹のカエルが産卵するのか分らないが、卵が多すぎてそのままにしておくと酸欠で全滅してしまうという。兄はまだ水の冷たい季節に卵をたらいなどの容器に分散させておき、ふ化したオタマジャクシを池に戻している。100 坪あるかどうかの狭い庭はブロック塀に囲まれてヒキガエルのサンクチュアリーを形成しているようだ。植物好きの兄は所狭しとばかり庭中に草木を植えている。この庭でのヒキガエルの生息可能な匹数はどのくらいであるのだろうか？

塀に囲まれているとは言っても門の下側に隙間があって時々カエルは散歩に出かけるそうである。塀の外は車の通過も多くロードキルの危険が高いものの、近所の方はカエルを見つけると「栃本さんちのカエルが来ていますよ」とすぐに連絡してくれるのだそうだ。何ともほのぼのとする話ではありませんか！兄はすぐに飛んで行って収容してくる事を繰り返している由である。立川市は東西に細長い東京都の真ん中ぐらい（私は都のヘソと称しているが・・・）にあり標高 100 ㍍の位置にあって、昭和の 20～30 年代には武蔵野の雑木林があちこちにあり、草原もあり多摩川水系の用水路も多く、網を振り回してトンボやチョウチョを捕まえ、雑木林ではカブトムシやクワガタムシをいくらでも捕まえることができた自然の豊かな時代だった。今では雑木林はマンションの森となり、魚すくいに励んだ小川も見る影も無くなっている。まさに故郷を失ってしまったという感がある。わずかにヒキガエルの生き延びている狭い庭だけが、よき時代の思い出を残してくれている。

４月のヒキガエル

ヒキガエルの産卵場は色々な場所に見られる。前月号で紹介した 7 か所も日当たりの良いオープンな環境は 7 の大明寺裏山の水溜りですでに変態が終わりつつあり、短くなった尾を持ったまま、水際でうごめいていた。真っ黒で正に“ヤセガエル”そのものの姿で、これがあの大型のヒキガエルの子供とは信じられない。そばを通りかかったアリより小さいと松下理事がびっくりしていたのが印象に残る。一方で、梅ケ畑の林道はスギやヒノキの植林で昼間でも薄暗いような日の当らない環境である。7 か所の繁殖場では最も遅い産卵で、大明寺の方では変態が終わっているのに、こちらはまだダルマ型幼生のまま、水底でパッチ状にかたまっている。同じような生野の山奥の環境に見えるが、太陽の恵みによってずいぶん差ができるものだと思う。

青草谷や大物（だいもつ）谷、大外（おそと）などの林道の真ん中での産卵は風前のともし火のようだ。大物谷では今月も産卵は確認できなかった。もともと、細長い小さな水溜りであり、アライグマによる食害の最初の発見場でもあり産卵量も少なかったので駄目になってしまったのかもしれない。しかし、昨年までは卵があったので次世代が育って復活してくれるかもしれない。車社会の現代では山仕事にも車が入って行くのでカエルたちにとっては厳しい将来かもしれない。ハンザキ研の湿地ビオトープへの導入も試みているがうまく行くだろうか。構内では体長 5 ㌢程の個体を 1 匹だけしか見つけていないが、これにもマイクロチップを埋め込んでおいたので、再会できることを楽しみにしている。そして、残念なことにはハンザキ橋上で親ガエルのロードキルが起こってしまった。周辺の山からやって来たのかもしれないが、初めての成体確認なので標本瓶に収めることにした。

現在では生徒や学生の解剖実習はカエルを使わないそうだ。昔は水田で喧しいほどの合唱団といわれたトノサマガエルや日陰でひっそりと暮らす仙人のような面持ちのヒキガエルは、いくら捕まえても心配ないくらいにいくらでもいて子供たちの格好な遊び相手となっていたのだった。また、専門の捕獲人がいて学校からの要望にこたえて教材として納品されてもいたのだ。大学 1 年時には、50 名ほどの同級生が 1 匹ずつのヒキガエルを渡されて解剖実習を行った。外観のスケッチから始まって、開腹して内臓の確認、皮をむいて筋肉の観察、そして最後が骨格のスケッチである。1 年間付き合ったヒキガエルである。現在の後輩たちはどうしているのだろうか？　カエルは可哀そうだからと言って代わりにアジやサバを使うような話も聞いたことがあるが、やはり人間に近い動物の方がいいのではないかと思う。

カエル類はオタマジャクシの時代だけでなく成体になってからでもヤゴやタガメなどの水生昆虫からサギなどの鳥類、ヘビなど多くの動物を支える餌動物としても重要な位置を占めていることも考えねばならないだろう。有害物質の影響も受けやすく色々な奇形の発生が知られており、人類へ警鐘を鳴らしてもくれる存在だ。沈黙の春は困る、やはりにぎやかな合唱が聞こえる環境を取り戻さなくてはならないのだ。

ホンシメジの試験栽培

会員　玉岡昇治

このたび、ハンザキ研究所の隣接林にホンシメジを植菌したところ、栃本理事長よりハンザキ研ニュースに書くように依頼があったので、なぜホンシメジを植えるようになったのか報告します。

数年前、私の友人が母親にアミタケ（別名シバハリ）を市場で１パック 1,000 円で買ったと聞き、昔近所の山でよく採ったことを思い出し探しましたが、山は人の手がはいらず荒れ、また松枯れ等により見つけることができませんでした。

そんなおり、ハンザキ研究所の会員になった時、研究所の周辺のキノコ調査を行っている事を聞き、専門の先生に聞けばどこの山でとれるか教えてもらえると思って参加させてもらえるようお願いして調査に同行しました。

ところが、現在の山の状況ではアミタケが発生しない事がわかりました。

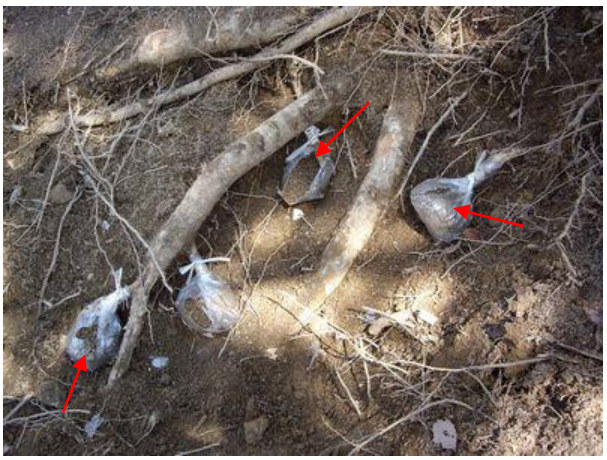
そこで、数年前、森林ボランティアの現場でホンシメジを植菌したことがあったのを思い出し、県の森林技術センターに連絡して種菌を無料でもらえる事になり、宍粟市山崎町まで出向き種菌とマニュアルをもらってきました。

また、植える山を私は持っていないので、事務局長の奥藤さんに相談して、研究所の隣の林を用意してもらい、この春にコナラの根を掘り出しそこに 15 株の種菌を植え付けました。後はこの秋に掘ってみて菌糸がうまく付いたか確認し、もしうまくいっておれば来年の秋に収穫できるようになります。山の急斜面でゼイゼイ咳き込みながらコナラの根を掘り出した努力がむくわれますことを祈ります。

どうかうまく付いていますように！

追記、作業中に昼になり食事の為、現場を離れて戻ると、種菌の入ったポリ袋をカラスに食い破られていたので、慌ててこぼれた菌を拾い集め、袋を補修して作業を終了しました。

種菌をコナラの根に取り付ける



カラスに食い破られた袋（矢印）

ハンザキ研をめぐる生き物たち

モリアオガエル

毎年のように多くのモリアオガエルが 5 月中旬から 7 月上旬に姿を見せる。繁殖シーズンの到来であるが、それ以外の時期には姿を見ることは少ない。多分、樹木の枝などで生活しているから目につかないのであろう。写真 7 の押しガエル（押し葉ガエル？）は、ハンザキ・プールの足場板を整備している時に見つけたものだ。重ねた板の隙間に潜り込んでいた所を潰されてしまったということだ。暖かくなるのを待って産卵場へ集まって来た先遣隊だろうが、気付かなかったこととは言え申し訳ない。こんな風に人間は知らぬ間に殺生を繰り返しているのだ。

アカネズミ

アカネズミはヒメネズミと共に再々当ニュースに登場している。小さな可愛い小ネズミであるが、ハンザキ研謹製のネズミ・トラップで 13 匹を川向うの藪へ放獣（？）してからは我が宿舎への夜の訪れが無くなった。少々さびしい気もするが、部屋中にゴマ粒のような糞を撒き散らす困りものでもある。このアカネズミも押し葉標本が、モリアオガエル同様の事故死体で発見された。ペッチャンコになったネズミの姿は何とも言えない悲しいものだ。どんな動物愛護家でも避けて通れない殺生であり、目につかないような小さな生き物も無数に殺しているはずだ。

ヤブサメ

流鏑馬は馬を走らせながら矢を放って的を射る行事だ。昔は武士の訓練としてのイベントであったろう。ヤブサメと思われる死体を拾ったと言って届けられたのはウグイスに近い仲間の小鳥であった。疾駆する馬のような猛スピードで飛翔することからの命名ではないかと思う。そのスピード故にガラス窓を避けきれなかったのだろう。これまでもトラツグミを始めとして多くの鳥類の死体を見つけたり届けていただいたりしているが、ヤブサメは初めての標本であった。これまたほんの一部の死体であり多くの死体は気づかれぬままに土に帰ったり動物の腹に収まったりしているのだろう。

私は、朝来群山自然公園の自然誌を記録しておきたいと考えて、あらゆるもののコレクションを始めた。そのことを知った多くの方々が気を付けて協力してくれるようになった。現在の所、キツネ・アナグマ・テン・イタチ・ハシブトガラスにトビが冷凍庫に収まっている。鳥獣は原則としてはく製にして残すようだが、技術も無く、金もかかるし場所を取るので標本瓶に入る小型のものは魚類並みにホルマリン液浸にして私は笑われている。

ハンザキ研日誌　　　　２０１３年４月

２日　庭からハンザキが観察できる農家民宿“まるつね”オープン
３日　ハンザキ研ニュース№85（１月号）納入
５日　富山の住職がまるつね宿泊１号で８個体観察と感激
７日　ヒキガエル産卵場調査 10(梅ケ畑、丁字谷)
９日　　同上　　　　　　　11（大外、長野）
１３日　シメジの種付け作業(奥藤事務局長、玉岡事務局員)
１５日　ヒキガエル産卵場調査 12(丁字谷、梅ケ畑)
１６日　　同上　　　　　　　13(大物谷、大外)
１７日　大阪府安威川ダム委員会事務局２名来所
１８日　神河町新田ふるさと村の中島支配人来所
２０日　・事務局会議８名
　　　　・ヤブサメの窓衝突標本１受増
２１日　新田ふるさと村にて講演会並びに先月保護のハンザキ原状復帰
２２日　安威川ダム委員会(大阪府庁にて)
２５日　豊岡河川国道事務所より２名来所
２６日　キノコ定期定点調査(横山先生他２名)
２７日　ヒキガエル産卵場調査 14(丁字谷、梅ケ畑)
３０日　　同上　　　　　　　15(長野)

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ハンザキ所長のツブヤ記録

４月は、下界ではサクラ濫満で春真っ盛りという頃だろう。標高 470㍍のハンザキ研では 10 日と 20 日にうっすらと雪化粧が見られた。生野の街中からでもサクラは半月ほど遅れる山の中である。しかし、確実に春がやって来ていることが生き物たちの行動で知らされてくる。冷たい水の中ではイモリのオスたちがメスの歩行を止めては青紫の婚姻色が出た尾を曲げて、細かく震わせている必死な姿が見られる。ヒキガエルも繁殖期を迎えてあちこちの林道の小さな水溜りに細紐のような卵塊を生み出している。

今年はオオルリのオスが毎朝のようにやって来た。窓の外のキリの枝に止まってはガラスに映る自分の姿に向かってアタックを繰り返す。ライバルのオスと勘違いしてのバトルだ。早朝にコツンコツンと窓ガラスに何かがぶつかる音がする。そっと覗いているとオオルリであることが分かった。10 日間程続いたが、残念ながら写真 4 のようなボケた物しか残らなかった。何しろ高速でアタックしてはサッと元の枝に戻ってしまうのだ。当ニュース№82 の写真 4“芸術的な小鳥の巣”の製作者はオオルリであることを脇坂さんに教えて頂いた。苔で作られた巣と産座に胞子柄を敷き詰めた物で、根気よさには驚かされる。